戦争をやっていいことは何もありません。子どもにしわ寄せが行ってしまう

20歳から30歳の大人は兵役で郷里にはいなくて、その上の年の人は在郷軍人として、18歳から19歳は志願兵として軍に行き、中学生は学徒動員として海軍工廠で働いていました。若い女性は女子挺身隊に入り、お母さんたちは、バケツリレーや竹槍の教練を行って、命がけで国を守ろうとしました。国民全員が戦争に駆り出されていました。

私も勝つと教えられていたので、怖いとは思いませんでした。ただ、食べるものがなくなって、生活がじわじわと苦しくなっているのは感じていました。それでも、負けてるとは思わなかったです。

戦争が終わった時は、「負けて悔しい」という気持ちと、「夜、空襲におびえなくてすむ。電気がつけられる」とうれしかったのを覚えています。

とにかく戦争はひもじい思いをします。戦争をやっていいことは何もありません。子どもにしわ寄せが行ってしまうのが本当につらいです。

八木朝乃さん
（白岩東）

B-29が編隊を組んでガンガンと音を鳴らして飛んでくるようになった

八木土雄さん
（三軒家）

戦争が始まると、学校の運動場の半分を畑にしてサツマイモを作っていました。小学校でも物資が無くて勉強なんかできませんでした。鉛筆も消しゴムもなく、教科書も先輩のお古を使いまわしていました。それもボロボロで読みづらかったです。先生も戦場へ行ってしまっていなかったので、代用教員の人が来ていました。

学校もそんな状態だったので、家で畑の手伝いをすることのほうが多かったです。麦踏みなどの作業を手伝っていました。

昭和18年頃から警戒令が出されるようになって、夜、家から灯りが漏れると、爆弾を落とされると言われ、夜でも灯りがつけられませんでした。明かりをつけるときは、裸電球の周りを黒い布で覆いました。少しでも光が漏れていると、巡回の人に注意されました。そもそも電球も全然足りなくて、1個の電球を各部屋に持って行って使っていました。

昭和20年にはB-29爆撃機が編隊を組んで、ガンガンと音を鳴らして飛んでくるようになりました。とても大きな音なので、来るのがよく分かりました。

私が住んでいた三軒家は周りが田んぼだらけで隠れる場所もないので、現在のアエルがある場所から少し南の山肌に防空壕を作って、何かあったときはそこへ逃げるようになりました。私も母と土を運ぶ手伝いをしました。4日間くらい避難したこともあります。

戦争が終わっても、貧しい生活に変わりはありませんでした。戦争は、終戦後も大変な時代を作ってしまいます。

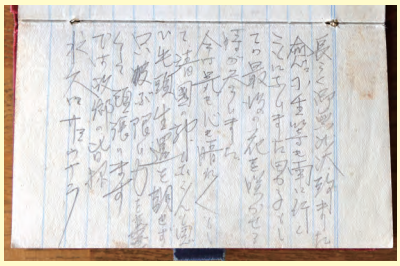
▲空襲の時に使った防空カバー。家の外に光が漏れないように電球を覆いました。

戦地から届いた遺書

西方の有海辰男さんのお宅に、1冊のメモ帳が大切に残されています。辰男さんの叔祖父にあたる有海豊さんが戦地から送ったものです。

始めの数ページには、分隊長としての心構えなどが書かれていますが、途中からは白紙のままです。めくっていくと、真ん中の1ページに鉛筆で「遺書」が書かれています。「最後の花を咲かせる時が参りました」「毛頭生還を期せず只及ぶ限り力を轟かして頑張ります」と戦地に赴く自分を鼓舞する言葉が並び、最後は「故郷の皆様　永久にサヨウナラ」と結ばれています。

豊さんは昭和20年5月18日に、沖縄で26歳の若さで戦死しています。この遺書を書いているとき、どんな気持ちだったのでしょうか。



◀豊さん直筆の遺書。戦地へ赴く決死の覚悟が伝わってきます。

原田益男さん
（白岩下）

昭和20年、本所の島の見晴台北側に爆弾が落ちました。爆弾は3つ落ちたようで、笹がザァザァと鳴るような音を立てて落ちてきました。見に、行くと田んぼがえぐれて、すり鉢状の穴が2つできていました。もう1つは島天神社の南側の山へ落ちたようで、大きな木が割れて、爆弾の破片が散乱していました。牧之原を爆撃した帰りに使わなかった爆弾を落としていったのではないかと思います。

別の日には、旭可鍛鉄の工場をグラマン戦闘機が空襲し、機銃掃射しました。その戦闘機めがけて日本兵が竹やぶから小銃で撃っているのも見ました。